

4. 21世紀学力

21世紀学力研究グループのまとめ

山田 孝・今村 敦 司
21世紀学力研究グループ

【抄録】 今津前校長より、「旧来の学習から21世紀の学習に転換する必要がある」との提起があり、本研究部会が誕生した。「21世紀の学力」をどう定義するのか、各方面の方々のお話を伺いながら検討を進めた。また、これらの調査結果等は、研究協議会の分科会でも報告することになった。これらの報告をまとめて要約したものが本稿である。

【キーワード】 21世紀の学力 8つの学力 生きる力

はじめに 本校の研究課題から見た「学力」

(1)本校の研究の経緯

①「総合人間科」設置以前

学校改革の目標として「国際理解と平和の教育」が本校の教育理念となる。

それにともない修学旅行・研究旅行の旅行先を中学3年の北陸地方の修学旅行から広島・大野島に、高校2年は長崎から沖縄に変更した。平和学習を学校教育の中心に据えて「被害」の歴史としての広島と「毒ガスの島」大野島から戦争について学ぶこととなった。また、高校2年生では、アジア太平洋戦争時に、地上戦が展開され非戦闘員である民衆の被害の多かった沖縄を旅行先とした。また、沖縄は現在も米軍基地が存在し、今日的な問題にも関連している。

②「総合人間科」設置 平成7年～9年 研究開発学校に取り組む。研究主題を『自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発－「総合人間科」設置の試み－』として、特設教科「総合人間科」の取り組みを始めた。

「総合人間科」設置のねらいとしては、「学習に遅れがちな生徒」への対応であり、成績が上位なものでも人間関係に苦しんだり、主体的に学ぶ意欲がない等の問題があった。こうしたことから、「学習の遅れ」を「人間形成に関わる学習の遅れ」と広義に解釈し、多様な見方で生徒を捉えることとし、主要教科に偏らない生徒観の確立をめざした。

さらに、「人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」を目指した。「自分の人生を自覚的に選択

する力」とは「人生のあり方、人生に対する態度」を自分で探求し、自分の人生について主体的に考える力と定義した。

そして、これらは「生きる力」とも解された。こうした「力」を育てるために、これからの世界を生きるための課題＝生命、環境、平和、民族、人権、開発などを21世紀的課題として「総合人間科」のテーマとしてきた。

③中高一貫カリキュラム検討・実施期あらたな研究開発学校に取り組む

平成12年～14年 平成15年～現在継続中

研究主題は、『「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」－総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発－』である。

また、「総合人間科」の継続と発展として、平成12年度より併設型中高一貫校としてスタートするための新しい中高一貫カリキュラムを編成した。「総合人間科」を中心に、新教科群、ソーシャルライフなどの新しい授業を創始して開始した。基本的には、「自分の人生を自覚的に選択する力」を育てることの延長線上にある。

・キャリア意識の形成

④中等教育センターの「高等教育が求める高校生の能力」に関するアンケートから。

2002年10月、「高等教育が求める高校生の能力」に関するアンケートを実施した。

これは、中等教育研究センター（センター長今津校長）が、センターの研究員（大学教員）の方々に実施したアンケートである。これにより、高等教育（大学）が中等教育に求めている「力」についての参考とした。（結果については特徴的なものを掲載した）

Ⅱ-1. 以下の27項目は、先生が所属する専門分野を専攻する学生（学部段階）にとって、どの程度必要な資質だとお考えでしょうか。それぞれの項目について、a. b. c. のなかからもっともあてはまる答えを選んで〔 〕内にその記号を記入して下さい。

- a. 絶対に必要である（この資質が欠けていると、学習に支障が生じる）。
- b. 必要である

（この資質が欠けても学習に支障は生じないが、効果的に学習を進めていく上では、あった方が望ましい）。

- c. それほど必要ではない（この資質があればそれにこしたことはないが、なくても何とかやっていける）。
- 1 自分の考えを他の人にわかりやすく話すことができる（自己表現力）
〔a〕 14 〔b〕 8 〔c〕 0
- 2 不明なこと、理解できないことを納得できるまで追及する（探究心）
〔a〕 19 〔b〕 4 〔c〕 0
- 8 物事を筋道立てて論理的に考察することができる（論理的思考力）
〔a〕 21 〔b〕 1 〔c〕 0
- 10 自分の考えを文章を用いて正確に表現することができる（文章表現力）
〔a〕 19 〔b〕 3 〔c〕 0
- 11 書物を読む習慣が身についている（読解力）
〔a〕 15 〔b〕 6 〔c〕 1
- 12 成果をあせらず、地道な勉強を積み重ねることができる（持続力）
〔a〕 15 〔b〕 4 〔c〕 2 〔NA〕 1
- 14 すでに確立されている知見にとらわれず、自分の頭で考えることができる（発想力）
〔a〕 18 〔b〕 3 〔c〕 1
- 15 数字・記号・式を扱うことが嫌いではない（数理能力）
〔a〕 8 〔b〕 11 〔c〕 3
- 16 パソコンなどの操作に心理的な抵抗がない（パソコン操作）
〔a〕 7 〔b〕 11 〔c〕 4
- 18 社会問題に関心がある（社会的関心）
〔a〕 11 〔b〕 8 〔c〕 3
- 19 人間と自然との関わり合いに関心がある（自然環境）
〔a〕 11 〔b〕 11 〔c〕 0

1. 21世紀学力部会の活動

今津校長の提起

「旧来の学習から21世紀の学習に転換する必要がある」との提起から、今年度21世紀学力部会を発足。

(1)これまでの学習会から

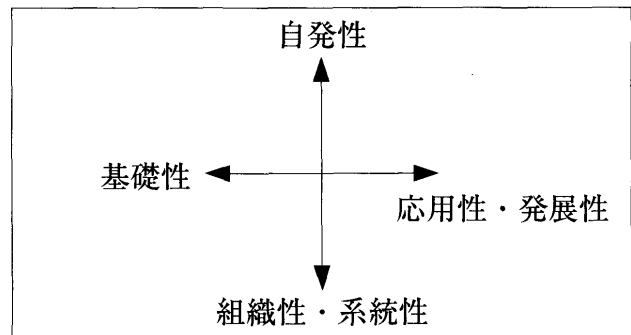
21世紀学力部会では、今求められている「学力」とは何かを検討するため学習会を持った。学習会では、現実の社会人として求められている「学力」とは何か、コンピュータ業界の第一線で働く大口さんのお話を伺った。また、教育関係では愛知県犬山市の教育委員として実際の教育行政に関わっている中嶋先生をお招きしお話を伺った。

・大口洋一氏（コンピュータ関係）

社会人として必要される「学力」は、「問題解決能力」「問題設定能力」「読み書きそろばんに、サイエンスを加える。筋道たてて考えることのできる能力」という点を強調された。

・中嶋哲彦先生（名古屋大学教育発達科学研究科）

「学力」か「能力」か「21世紀の能力」のことについて言った方がよいのではないかと。「学力」は学校における教育的営みを通して獲得され現実化される「能力」である。学校ができることを限定して、それ以外を社会にまかせる。学校では、基礎性、組織性、系統性が求められる。



中嶋先生の図より

(2)アンケートの実施

これからの社会で必要とされる「力」を8つに細分化できるのではないかと論議してきた。この論議の結果、「8つの力」と2つの基礎力をベースにした「力」が各教科、総合人間科、新教科、行事等の中でどのように定着しているか(生徒)。また、どのくらい必要と考えられているか(教師・保護者の意識)を調査してみた。アンケート結果は別紙。

(3)今後の課題

「8つの力」を基礎にアンケートを実施したが、仮説としての「8つの力」の内容を今後検証していく必要がある。

(山田 孝)

2. 「21世紀の学力」研究部会設立経緯

本校は併設型中高一貫校として研究開発に取り組んで、4年目になる。研究開発の柱としての総合人間科、新教科、選択プロジェクト、ソーシャルライフなどの授業を通して、生徒がどのような力が付いたかについて評価をすることを考えた時、従来の教科の学力でははかることができない新たな考え方をすることが必要になった。

そこで、「21世紀の学力」の研究部会として、今後の学校のあり方を含めて、将来社会に出て必要な（役立つ）力、学校でつけることのできる力、また、つけさせるべき力は何であるかを規定した。その上で、生徒の教科等の授業でその力が付いたと感じているかどうかの実態調査と、保護者、教員がどの教科でどの力を身に付けさせたいと考えているかについての調査を行った。

21世紀の学力を規定する過程では、研究者、一般企業の方等に、社会に出てからの若者に求める力や学力について感じていることのお話を伺ったり、キャリア関係の文献を参考にしたりしながら話し合いをした。その結果、学力を「学校でつけさせることのできる力」と限定した上で、8つの力と2つの基礎力に分けた。生徒には直接その力が付いたかどうかを聞くのは表現上難しいので、それぞれの力を教科に換算して聞き方を変えて調査をした。以下がその力である。

① 理解する力

書いてあることや他人の発言を正確に理解する力がないと、自分で考えることしかできなくなってしまいます。私たちは何かを学ぶとき、目の前で起こっている状況について考える以外は、話されている言葉を聞くか、書いてあることを読んで理解するかという、いずれかの作業を必ずしています。つまり、何かを学ぶときには「正確に理解する力」が、学ぶ以前に必要なわけです。しかし、言葉は日本語に限らず、英語や中国語、時にはコンピュータのプログラムに必要な言語なども理解には必要ですから、広い意味で解釈してください。

② 表現する力

私たちは自分で考えたことを、様々な形で他人に表現します。ある時は言葉で、またある時は絵や音で、さらには製作物や、自分の体などで自分を主張したり、意志を明らかにしたり答えたりします。特に身体で表現するという点については、手を使ってものを書いたり、絵を描いたり、道具を使いこなしたり、ものを作ったり、運動したり、体全体で道具を使いこなしたりといった活動もこの中に入ります。正確に伝えようとしたり、主張したりといった、広い意味で自分の内面を他者に伝えるのに必要な力を「表現する力」とします。この「表現す

る力」がないと物事を学んだ成果を他者が確認することができませんし、学んだ本人がその成果を発揮することもできません。

③ 思考する力

私たちは物事を考えたり、理解したりする時に、頭の中でさまざまなことを関連させたり、筋道を立てて考えたり（論理的思考）、共通点を探り出したり、変わらないもの（本質）を見つけたりします。また、多様なものを見方ができることも重要です。これらの作業に必要な力を「思考する力」という表現でまとめることができます。これは簡単に言うと「さまざまな考え方を使える力」ということができます。どんなことを学ぶにも物事を考える作業は必要であり、特に大学の先生はこの力が備わっていることを求める人が多いようです。

④ 情報や知識をやりとりする力

私たちの社会は「情報化社会」といわれています。テレビや新聞に加えてインターネットが普及した現在は、コンピュータや携帯電話などで気軽に大量の情報を得ることができるようになりました。文字や映像による情報が大量にある現在においては、自分が必要な情報を得る力や、嘘やいい加減な情報が多く存在する中で、正確な情報を得たり、また、正確かどうかを判断する能力を身に付けていることがより重要になってきました。さらに、自分が得た情報を、発信したり、以後も自分や他人が効率よく使えるようにするための保存方法（アーカイブ）を身に付けていることも必要です。解釈の仕方によっては「言葉を理解する力」や「表現する力」と重複する力になるかもしれませんが、ここでは「情報」というものに限り、「言葉を理解する力」や「表現する力」の中の特別な力として取り上げます。

⑤ 自分を知る力

これは自分の状態を客観的に認識する力とも言えます。自分の体がどのようなになっているのか（例えば、仕組みを知っていること）、どのような状態にあるのか（普段と同じか違うのか、どのような体勢にあるのか、どのような感情にあるのか、他と比べて自分の位置はどのようなになっているか）などがわかることです。今の自分を知らることが、この先何を学ぶか、どうするべきかを考える基本となります。

⑥ 人や社会と関わる力

「人や社会と関わる力」というのは、今後重要になっていくものと考えられます。これは、簡単にいえば、「人や集団、社会と自分がうまく関わって生きていくことのできる力」といえます。人間はまったく一人で生きていくことはできません。必ず他人と接し、関わり、集

団に所属して社会の一員となって生活しています。人とうまく関わっていくためには、他人の気持ちに立って物事を考える力、他人のために自分がすべきことを考えられる力などが必要です。礼儀や場を考えて行動できること力も必要です。社会に出てお客さんと接するような仕事をするときにはこの力が必要になってきます。時には自分の気持ちを抑えたり、新たな関係を考えて接したりといったことは必要です。集団とうまく関わっていくためには、自分が集団でどのような役割をすれば全体がうまくいくかを考えられる力(ある時はリーダーとして、ある時は補佐として、またあるときは実行者としてなどの役割を使い分けられる力)、自分の主張と集団の意見のバランスを見て調整できる力(ある時は自分の意見をしっかり言い、またあるときは他人の意見と自分の主張に折り合いをつけたり他人の意見に従ったりすることができる力) 社会とうまく関わるためには、他国や異文化の人たちを理解しようとする態度を身に付けていること(平和や国際理解に対して関心を持っていること。これも一つの力と考えます。)や、自分が地球市民としてどのようなことをすべきか考えて行動できる力(地球規模で考えると、この先資源は枯渇し、環境は悪くなっていきます。地球上の人類がこれらの問題に対してみんなの問題解決をする努力が必要になってきます。簡単にいえば、みんなのために協力できる態度を持っていることです。)を学んで大人になることは、将来の社会を背負って立つ人間を育てる学校で学んでおいてほしい力だといえると思います。

⑦ 問題を設定する力

私たちが物事を学んだり、社会に出て生活をするときには、自分の理解できない現象が起こったり、努力を要する問題が生じたりします。「理解する力」の説明に出してきたように、何かを学ぶときは目の前で起こっている状況について考えることが必要になってきます。そのとき、目の前に起こった状況を冷静に観察したりして原因を突き止め、そのことに対して、自分はどのようなことをしなければならないか、また、そこで問題となっていることは何かを分析してから、対処しなければなりません。この「問題を設定する力」とは、何が問題なのかということについて分析できる力のことを指します。たとえば、世の中に起こっている出来事について、共通する問題点は何であるかわかったり、出来事の問題の本質が何であるかわかったりする力のことです。また、自分の置かれた状況に対して何をすべきかを的確に判断できる力とも言えます。

⑧ 問題を解決する力

冷静に観察、分析して原因と問題点を設定したら、次に、対処方法を考えて実行できる力が必要になってきま

す。対処方法についても、自分でできるのか、他人の協力が必要なのか、どこまでできるのか、できないのか、どのような情報が必要なのか、どのような順番で何をしなければならぬのかなど、さまざまなことを考えなければなりません。

また、努力をしようとする態度(つらいことを克服して乗り越える力)も必要です。これがなければ進歩はないからです。総合人間科の授業の中でも感じたことがあるかもしれません。しかし、社会に出て仕事をするようになると、この力が必要になってきます。一般企業に勤める役員の人は、この力が備わってほしいと考えているようです。もちろん研究者にとっても必要な力です。なぜなら本当の研究とは「今までわからなかったことを、今までわかったことと自分の推察から実験して正しいことを証明して、わかるようになること」なので、まさに問題を設定し、解決する力がないとできないものであるからです。その過程でたくさんの失敗があるので、努力をしよう、続けようとする態度も必要になってきます。部活動で、何かうまくいかないとき、何か技術を身に付けようとしているとき、興味あることを調べて行き詰まったときにもこの力も必要になります。

⑨ 基礎力1(知識・技能)

上の①～⑧までの力を出す基礎としての力を指します。これがないと他の力を発揮する土台がないというようなものです。具体的には、ものの意味が正しく分かる日本語の言語力や、頭の中で数字を使って量や大きさ平面や空間などの概念で物事を考える力もこれに当たります。

⑩ 基礎力2(感性・好奇心)

子供は生まれつき意欲、好奇心を持っています。0～3歳頃の子供を思い浮かべていただければわかりますが、自分の身の回りの物事に対して常にさわって動かし、より難しいことに挑戦してみたり、何であるか聞いたりします。こういったさまざまなものに対する好奇心、感性は人間の成長や進化には欠かせません。学力をつけるにしても、好奇心や感性がないと自分のものとして獲得されないと考えました。そのような意味では、⑨と同様、基礎的な力とすることができると考えました。アンケート概略

調査日時 生徒 12月3日(水) 保護者、教員 12月3日(水)～8日(月)

調査対象

生徒 中学1年生～高校3年生の各学年1クラス
保護者 中学1年生～高校3年生の各学年1クラス
教員 本校教員(常勤)37名

生徒実施クラス

中1→B組 中2→A組 中3→B組
 高1→C組 高2→A組 高3→B組

保護者実施クラス 中1→A組 中2→B組
 中3→A組 高1→B組 高2→C組 高3→A組

実施状況 (有効回答/在籍数)	中1	中2	中3	高1	高2	高3
生徒	40/40	40/40	39/40	39/40	36/37	39/40
保護者	35/40	33/40	37/40	36/40	18/39	23/39

調査用紙は別紙参照

集計 教科等別に、回答数、割合、平均値、標準偏差、
 学年とのクロス集計をした。また学力別に平均値
 を出した。

以下は、教科等別と学力別に分析をした結果と考察である。

2. アンケート分析

1 結果

平均値	理解			表現			思考			情報			自分		
	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員
国語	3.11	3.6	3.76	3.1	3.53	3.82	3.04	3.54	3.71	2.93	3.29	3.62	2.82	3.15	3.29
社会	2.93	3.36	3.51	2.65	2.98	3.14	2.96	3.3	3.51	2.88	3.44	3.54	2.82	3.03	3.31
数学	2.89	3.51	3.65	2.77	2.93	3.09	2.96	3.54	3.76	3.01	3.06	3.18	2.98	2.8	2.79
理科	3.09	3.39	3.59	2.8	2.94	3.03	2.84	3.49	3.74	2.61	3.22	3.38	2.78	2.9	3
音楽	2.87	3.02	3	2.69	3.5	3.82	2.71	2.93	2.79	2.66	2.77	2.79	2.79	2.9	3.21
美術	2.94	2.94	2.94	2.78	3.54	3.79	2.95	3.12	3.09	3.1	2.76	2.79	3.01	2.99	3.33
体育	3.21	3.08	2.88	2.97	3.26	3.39	3.2	2.99	2.91	3.26	2.91	2.88	3.09	3.33	3.45
保健	3.18	3.38	3.32	3.06	2.77	2.76	2.99	3.14	3.18	3.08	3.25	3.09	3.1	3.31	3.5
技術	2.87	3.22	3.26	2.77	3.28	3.59	2.87	3.25	3.15	2.87	3.09	3.59	2.77	2.96	2.97
家庭	2.92	3.21	3.32	2.84	3.2	3.38	2.73	3.18	3.24	2.84	3.11	3.38	2.89	3.11	3.26
英語	3.13	3.58	3.62	3.08	3.55	3.65	3	3.4	3.21	2.68	3.41	3.53	2.87	3.12	3.15
総合人間科	3.25	3.52	3.57	3.16	3.56	3.8	3.19	3.65	3.66	3.13	3.66	3.77	3.28	3.56	3.71
ソーシャルライフ	3.2	3.44	3.28	3.07	3.45	3.45	3.14	3.56	3.62	3.15	3.56	3.55	3.17	3.56	3.72
選択プロ	3.17	3.43	3.35	3.02	3.4	3.48	2.9	3.46	3.39	2.95	3.37	3.42	3.17	3.36	3.35
新教科	2.95	3.44	3.63	2.89	3.28	3.3	2.85	3.44	3.7	2.88	3.38	3.52	3.18	3.35	3.56
情報	2.53	3.46	3.27	2.37	3.24	3.31	2.42	3.34	3.35	2.5	3.53	3.88	2.46	3.26	2.81
行事	3.17	3.34	3.19	3.14	3.58	3.72	3.17	3.49	3.38	3.17	3.47	3.53	3.29	3.56	3.5
平均値	社会			設定			解決			知識			感性		
	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員	生徒	保護者	教員
国語	2.89	3.14	3.35	2.93	3.04	3.03	2.85	3.14	3.06	3.14	3.42	3.56	2.93	3.47	3.44
社会	2.72	3.53	3.71	2.86	3.21	3.37	2.66	3.19	3.31	3.14	3.27	3.4	2.88	3.4	3.26
数学	2.91	2.67	2.56	2.69	3.3	3.38	2.79	3.43	3.68	2.88	3.41	3.56	2.89	3.28	3.41
理科	2.78	2.87	3	2.7	3.22	3.62	2.9	3.31	3.64	2.9	3.37	3.56	3.03	3.45	3.47
音楽	2.9	2.87	2.88	2.59	2.6	2.62	2.81	2.66	2.62	2.93	3.16	3.33	3.08	3.57	3.58
美術	2.97	2.76	2.82	2.54	2.6	2.79	2.58	2.59	2.88	2.88	3.1	3.38	3.04	3.52	3.59
体育	3.28	3.06	3.18	3.15	2.88	2.94	3.23	2.9	3.06	3.12	3.26	3.27	3.38	3.36	3.27
保健	2.88	3.24	3.44	2.82	2.99	3.06	2.98	3.12	3.15	3.23	3.23	3.18	2.98	3.18	3.03
技術	2.78	3.01	2.88	2.89	2.98	3.12	2.92	3.07	3.26	3	3.3	3.5	2.88	3.33	3.35
家庭	2.95	3.2	3.47	2.83	2.94	3.18	2.83	3.05	3.26	3.02	3.22	3.47	2.99	3.27	3.21
英語	2.9	3.4	3.41	2.86	3.07	2.94	2.78	3.12	3	2.84	3.46	3.62	3.24	3.48	3.35
総合人間科	3.18	3.64	3.8	3.16	3.52	3.74	3.08	3.51	3.74	3.34	3.34	3.09	3.13	3.58	3.29
ソーシャルライフ	3.07	3.58	3.86	3.01	3.43	3.28	3.04	3.47	3.52	3.14	3.18	2.9	3.13	3.41	3.03
選択プロ	2.98	3.32	3.23	3.05	3.36	3.35	2.96	3.38	3.39	3.19	3.34	3.19	3.06	3.47	3.45
新教科	2.94	3.29	3.59	2.7	3.33	3.56	2.91	3.38	3.52	2.76	3.19	3.33	2.98	3.43	3.59
情報	2.45	3.34	2.96	2.56	3.17	3	2.56	3.21	3.08	2.7	3.34	3.27	2.56	3.36	3.04
行事	3.38	3.71	3.75	3.15	3.43	3.59	3.2	3.5	3.5	3.31	3.21	2.97	3.32	3.58	3.41

3. 各学力の結果と分析

(1)理解する力

生徒の平均値は、国語、英語、体育、保健と総合人間科などの研究開発で行う授業が高くなっており、保護者は国語、数学、英語と研究開発授業、教員は逆に主要5教科と総合人間科、新教科の平均値が他より相対的に高くなっている。3者共に平均値が高かったものは国語、英語、総合人間科で、生徒と保護者が高く、教員がそれほど高くなかったものは、ソーシャルライフ、選択プロジェクト、行事であった。また、生徒の実感と保護者・教員の期待がずれていたのは体育で、生徒は保護者や教員が期待する以上に身に付いてと感じているようである。

言語を扱う授業のほか、自分で理解しないと深く学ぶことができない総合人間科で理解する力が付いており、保護者・教員も期待していることが言えよう。保護者は読み書きそろばんといった基礎的な教科と、本校の研究的な授業に理解する力が付くことを期待しているが、教員は主要5教科と総合学習、新教科群に理解する力が付くことを寄り強く望んでいると言えよう。

(2)表現する力

生徒の平均値は、総合人間科、行事、国語、英語、保健、ソーシャルライフ、選択プロジェクト、が高く、情報、社会、音楽が相対的に低い値となっている。保護者と教員は、共に国語、音楽、美術、英語、総合人間科、行事等の平均値が高くなっており、保健が相対的に低くなっている。3者とも国語、英語、総合人間科、ぎょうじの値が高い。また、音楽では、保護者、教員の期待が高い水準に達しているが、生徒においては17項目中最低レベルである。逆に、生徒の評価では高い保健では、教員と保護者の期待は最低レベルである。

言葉を話したり書いたりする場が多いものは値が高くなっているのは分かるが、行事が3者とも含まれているのは、注目すべき点である。行事を広い意味での自己表現の場と捉えているものと思われる。

(3)思考する力

生徒の平均値は、全体的に他の力と比べ、評価が低い。その中でも情報の値が特に低くなっている。体育を除く実技系教科においても同様の傾向がある。逆に生徒の評価が高かったのは、体育、総合人間科、行事、ソーシャルライフである。保護者・教員の解答傾向は似ており、英語を除く主要教科と総合人間科、ソーシャルライフに対する期待が高い。保護者は、行事に対する期待が高いが、教員はそれほどでもない。逆に、教員の新教科に対する期待は数学、理科、国語に次ぐ高い水準を示しているが、保護者の期待は集めていない。

生徒の主要5教科に対する値が低いのは、今後授業の

改善の余地を残すところである。保護者・教員は数学と理科で思考する力を付けたいと期待しているが、生徒の値はそんなに高くなっていないといったずれを生じている。

(4)情報や知識をやりとりする力

生徒の平均値は体育、行事、ソーシャルライフ、総合人間科、美術等、実技系のもが高く、情報の授業が他と比べて低くなっている。保護者と教員の解答傾向は似ており、音楽、美術、体育で相対的に低く、総合人間科と情報で高い値となっている。保護者はさらに社会、ソーシャルライフ、行事でも高い値を示している。

3者とも高い値を示している総合人間科は、確かに知識や情報を主体的にやりとりする場となっているので、生徒の意識と保護者・教員の期待が一致している。一方、美術については、生徒の評価が高い割には保護者と教員の期待が低くなっている。中学生が総合学習などにおいて発表をする際に、美術の知識を使って情報を効果的に伝える掲示物を作ることができると考えているのであろう。

(5)自分を知る力

生徒の平均値は行事、総合人間科、新教科、ソーシャルライフ、選択プロジェクト、保健、体育などの実技的なものの評価が高くなっている。保護者・教員においても総合人間科、ソーシャルライフの期待が高くなっていて、数学、理科、技術の値は低い。

身体を使ったり、自分で活動したりするような授業では、自分の限界などを意識しやすく、結果的に生徒の評価が高くなっていることが考えられる。数学、理科、技術での期待が低いのは、教科の授業の中に、自分を意識する場が少ないことからこのような値になっていると考えられる。

(6)人や社会と関わる力

生徒の平均値は、概して低い。その中では行事、体育、総合人間科の評価が高く、情報、社会、理科、技術の評価が相対的に低くなっている。保護者と教員の傾向は似ており、総合人間科、行事、ソーシャルライフ、社会の値が高く、数学、理科、音楽、美術の値が低い。

社会については、生徒の評価が低く、保護者と教員の期待が高いというずれを生じている。実際に授業を受けている生徒にしてみると、例えば、中学1年生や2年生は地歴を学んでいて公民の授業を受けていないので、社会と関わりを強く意識した教科であることに気がつきにくいといった事情があったり、逆に、体育における集団競技の授業で、自分と集団の在り方を意識させられる場があったりと、「社会」をどのようなレベルで捉えるかが曖昧であるために評価がぶれることもあるのではない

かと考えられる。しかし、3者とも値の高い総合人間科では、フィールドワークを通して学校外に出かけることが必ずあるので、「人や社会と関わる力」が付くと考えられているようである。

(7)問題を設定する力

生徒の平均値は、総合人間科、行事、体育、などが高く、情報、音楽、美術が低くなっている。保護者は総合人間科、ソーシャルライフ、行事の値が高く、音楽、美術の値が低い。教員も音楽、美術の値が低く、に総合人間科、理科、新教科、行事の値が高い。

問題を設定する力は、総合人間科と行事で生徒の評価と保護者・教員の期待が高い値で一致していることから、自分で課題や学校祭等の行事を取り組む時に出てくる問題点に対して、そのように対処すべきかを考えさせられる場面が多いことがこのような結果につながったのではないかと考えられる。また、ソーシャルライフの値が生徒と保護者で高くなっていることから、生徒が人間関係などでどのように対処すべきかを考える際の参考になっていて、保護者もそれを望んでいるということが言えよう。教員の値が低いのは、ソーシャルライフの授業を、生徒の人間関係に即効性を求めるものでないというスタンスで行っていることが考えられるが、生徒と保護者の様子を考えると、生活指導に役立つための工夫をさらに進めていかなければならないという課題が浮かび上がってくる。教員は理科の値が高くなっているが、ここには課題解決型の学習を進める上で、問題設定能力もつけさせたいという願が見える。

(8)問題を解決する力

生徒の平均値は総合人間科、行事、体育、ソーシャルライフ、の値が高く、社会、美術、情報の値が低くなっている。保護者は総合人間科、行事、ソーシャルライフ、数学の値が高く、音楽、美術が低い。

教員は総合人間科、理科、数学の値が高く、保護者と同様、美術と音楽の値が低い。生徒や保護者にとっては、動きがある授業でこの力が付くことを意識したり期待したりしているようであるが、教員は、数学、理科の値が高いことから、論理的に解決をする力を期待している一面があるようである。生徒の社会の値が低いのは学年で習う分野が違うこともあるが、国際関係の問題解決は社会的なものが関係するだけに、教員にとってはもう少し値が高くなるよう、授業の工夫のしどころがあると考えられる。

(9)基礎力1（知識・技能）

生徒の平均値は、国語、社会、体育、保健、総合人間科、ソーシャルライフ、選択プロジェクト、行事の値が高く、新教科と行事の値が低かった。保護者は国語、数

学、英語の値が高く、美術の値が低かった。教員は、国語、数学、理科、技術、家庭、英語の値が高く、ソーシャルライフ、行事の値が低かった。

基礎力1（知識・技能）は、「その知識や技能がないと応用的なことが学べなかつたりできたかつたりする基礎的なもの。」と規定されており、保護者の「読み書きそろばん」的な発想や、教員の生活に関する技能としての技術家庭科でこの力を付けてほしいという期待は納得できるものである。しかし、実際の生徒は、行事、社会、総合人間科といった応用力や実践的な力が必要な場面でも基礎的な知識や技能が身に付くと意識しているようである。なぜ、どのようにしてここからこの力が身に付くと考えているかについては、質問の仕方にも因るが、もう少ししつこく調査が必要である。

(10)基礎力2（感性・好奇心）

生徒の平均値は体育、英語、行事の値は高く、情報の値が低い。保護者は音楽、美術、英語、総合人間科、行事の値が高く、数学、保健、家庭科の値が低い。教員は、音楽、美術、新教科の値が高く、保健、ソーシャルライフ、情報の値が低い。

生徒は、英語や体育の授業の中で、センスを磨けたという意識などからこれらの値が高くなったと考えられる。また、様々な行事で好奇心が育ってきたということは容易に想像がつく。しかし、保護者や教員が期待するような芸術的なものへの感性や好奇心が育ってほしいという期待は生徒の意識とは一致していない。保護者の総合人間科の値の高さからは、自分の興味のあることについて、もっと好奇心を持って調べてほしいという願いが読みとれるが、生徒や教員の平均値は、相対的にはそれほど高くなっていない。教員の新教科の値が高いことは、生徒に既存の教科的な発想や考え方で学習するのではなく、違った切り口で学習をすることにより、今までと違ったものを発見できるかもしれないという、知的好奇心を育てたいという期待が読みとれる。

(今村敦司)